(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目　アイヌ考古学研究・序論

氏　名　宇田川　洋

北海道の先史時代は、旧石器時代、縄文時代、続縄文時代、擦文・オホーツク時代と続き、それらの後にアイヌ文化の時代が設定されている。このアイヌ文化の時代は、いわゆる日本史（和人史）の立場、北海道史の立場、アイヌ史の立場からの時代設定がなされているが、筆者は考古学の立場からこの時代を設定している。年代的には擦文・オホーツク文化の時代の終末年代を 13 世紀とし、14 世紀頃から 18 世紀末頃までを「原アイヌ文化」と称し、その後の現代に繋がる変質したあるいは変質せしめられた段階を「新アイヌ文化」と呼んでいる。そして、「原アイヌ文化」の段階はさらに細分して考えることができ、14～15 世紀頃の「前期アイヌ文化」、16 世紀段階の「中期アイヌ文化」、17～18 世紀頃の「後期アイヌ文化」を設定している。これらの時代区分はあくまでも考古学の立場からのものであるが、このようにアイヌ文化を考古学的な方法論でアプローチすることによって、その成立のプロセスを解明しようとするのが筆者のいう「アイヌ考古学」である。

本論の構成は三部とし、第１章は「アイヌ文化を考古学的に考える」とした。ここでは、実際の調査例としてチャシ遺跡・中世の館址・幕末の陣屋跡・アイヌの送り場（すべての生物や道具がもつ霊魂の送り儀礼を行った場）・墓の実例を紹介してみた。その編年的位置づけを行うのに際し、無文字社会のアイヌの記憶力の確かさからアプローチしてみた結果、15～16 世紀の前期アイヌ文化の時代に達した。アイヌ文化の形成過程を探るに当っては、従来の竪穴住居からアイヌの平地住居への転換およびカマドから炉への変換をアイヌの火に対する信仰から捉えることができることを説明し、それが内耳鍋の文化を形成したことと結びつけてみた。そしてアイヌ自製品に対して内耳鉄鍋の如き本州製品（和産物）の流入の増加は、自集団意識を高めさせる結果にもなったようである。それが「蝦夷地」と呼ばれた時代のアイヌ族の民族的アイデンティティの確立を含むアイヌ文化の確立につながったようである。16 世紀からの積極的なチャシの構築はそのような和人との抗争の増大とも結びつくのである。

第２章は「ものを通して見る」とした。ここでは、北海道を含む北方地域で重要な役割を果たした道具類つまり考古学でいう物質文化（遺物）のそれぞれがもっている特性を分析し、それらが東北アジア世界あるいは北米までを含む北方地域でどのような位置づけがなされるのか、あるいはアイヌ独特のものであるのか等を分析してみた。言語系統の面でまだ定説が無いアイヌ族の位置づけをも視座に入れている。初期の和産物の代表的な鉄鍋は交易という背景を考えることができ、アイヌ自製品の軽石製火皿はその祖形をエスキモー文化の石ランプにまで求めることができるようである。それは毒窩をもつ矢尻の文化圏ともほぼ重なり、「東北アジア海岸トリカブト毒矢文化圏」とも重なるものであることが解明された。言語系では、考古学からは古アジア語族系の可能性が出てきたのである。しかしアイヌを含む北方地域の煙管と喫煙儀礼を考えると、古アジア語系とツングース系に共通して見られ、まだアイヌ族の所属は不明といわざるを得ないが、考古学からのアプローチも重要であることがわかる。

北方諸族の仕掛け弓・罠では、けもの道に弓を張って仕掛けるいわゆる仕掛け弓はやや特殊な構造とメカニズムをもつが、アイヌ集団とアムールランド周辺の諸族に見られることが判明した。またその特殊形の縦型のタイプ（シベリ

アでは cherkan と呼ばれる）も同様の広がりをもつことが分かったが、前者はクマ・シカ等の大型獣に、後者はカワウソ・テン・イタチ等の毛皮獣に主に用いられるものである。特に毛皮交易の問題ともかかわってくるが、オホーツク文化の中にこの仕掛け弓の部品が存在する可能性を指摘しておいた。

擦文時代の木製品を考えると、それらはほとんど後のアイヌ社会に見られる木製品と同様のものであることが指摘できたが、今後はここでは扱わなかった近年資料が増加しつつあるオホーツク文化のものとの対比も必要である。

弓弭形角製品の解釈では、樺太アイヌの楽器である五弦琴（トンコリ）との関連を考え、出土品をミニチュアと見て、木製品で復元してみたところ実用品たりえるものであることが理解でした。一種の実験考古学である。

北方地域の考古学的文化接触を考えるために、樺太・千島・カムチャツカ・アリューシャン列島の送り場遺跡と出土遺物を見てみた。送りの形式では北海道の場合より限定され、竪穴上層遺構と貝塚という形式しか認められなかったが、出土遺物からはアイヌ文化の影響が明確にカムチャツカ半島まで及んでいることが判明した。

北海道の考古学上のアイヌ文化期の貝塚を検討して見ると、貝類にやや特色が認められ、それは近代のアイヌが食用としていたものとやはりほぼ重なることが分かった。クロアワビやアザラシ等を出土するアイヌ期に特徴的な存在として位置づけられる貝塚は、交易の盛行に伴うとする意見もあるが、予測はできてもまだその検討には資料が少ないと感じる。

動物意匠遺物に関しては、北海道各時代出土のものをすべて集成したであるが、そこからは動物信仰の推移が読み取れた。つまりオホーツク文化に至っての三分化(クマ・海獣・トリ)は、後のアイヌの ekashi-itokpa（祖印）の基本形と一致するものであると結論できたのである。つまり、動物信仰の面でオホーツク文化がアイヌ文化に与えた影響が大であったことを証明できたのである。

第3章は「遺跡を考える」とし、アイヌ文化の考古学的調査の実例を示した。まず、代表的なクマ送り（iomante）の実例として標茶町シュワンの例を紹介したが、民族誌記載だけでは表現されない生の出土状態を記録することができた。またシマフクロウ送りという iomante も確認できたが、それは動物考古学

の成果でもある。

アイヌ文化期の送り場遺跡では、北海道の全遺跡を網羅し、時代別の検討を行い、また送りの形式を 7 つに分類し、その変遷のプロセスを考えてみた。竪穴等の窪みを利用する形式が古く、貝塚形式が現れ、最新形式は御神木形式に推移することが理解できた。

アイヌ期の別の遺跡であるチャシ跡遺跡は、「チャシとアイヌ社会」で概説を行っておいた。定義について触れ、古記録や口承文学（yukar）に見られるチャシ、立地と構造、機能と伝承、年代的位置づけ、アイヌ文化の中での位置づけを考察している。チャシ地名史料集成では最新のデーターを提供してみた。これは地名学から逆に考古学に迫る方法論である。同様にアイヌ伝承からチャシにアプローチする方法もある。それが「チャシとアイヌ伝承」である。その分析を通して、チャシが一般的にアイヌの砦といわれる所以を理解することができた。つまりチャシにまつわる伝承のほぼ半数が闘争伝承なのである。チャシを分析する一つの方法としてチャシ人口を考えてみたのが「チャシコッ分布の一分析例」である。川筋毎に考えてみたが、特殊な場合を除いて 22～44 人に 1 個の割合でチャシが構築されていたらしいことが理解できた。それは集落（kotan）との関係あるいは集落の領域（iwor）を考える上でも重要なことであろう。「アイヌコタンの立地試論」のところでも触れておいたが、チャシとコタンは本来密接な関係にあるものである。「チャシ跡遺跡の地域研究」では、チャシの形態と壕の形態分類を記号化して、チャシ分布の濃密な根室半島と標茶町の場合を比較検討してみたものである。根室半島では面崖式でコの字状壕をもつものが優勢であることが分かったが、そのことは寛政国後の戦い（1789）と関係するチャシの最後の姿を表現しているものということができる。内陸に位置する標茶町の場合は丘頂式で 1 条壕あるいはテラスをもつものが多く、それはチャシの早い段階のものである可能性がある。

アイヌ墓に関しては、擦文・オホーツク文化の例との比較、樺太との比較を行い、擦文人は北海道アイヌに、オホーツク人はサハリンアイヌおよびクリールアイヌにつながる系統であった可能性を指摘しておいた。